三中だより

令和５年度　４月号

令和５年４月２４日発行
荒川区立第三中学校
（学校通信　Ｎｏ．２）
校長　　小　柴　憲　一

「家読（うちどく）取組推進期間」について

荒川区では、ゴールデンウィーク期間、夏季休業期間、冬季休業期間、春季休業期間の年間4回の「家読（うちどく）取組推進期間」を設けています。

この4回に共通しているのは、いずれも子どもたちが家にいる時間が長いということ、家族と会話をする機会が多いということです。

そもそも読書をすることには、「様々なジャンルの本を読むことにより語彙力や文章力が養われる」「活字を読んで理解していくことにより想像力が豊かになる」などのほか「教養や知識が身に付く」「生活に役立つ知恵を得られる」などの様々な効果があることが知られています。インターネットなどで検索することによっても知識を得ることができるでしょうが、ストーリー性のある文章の中から得られた知識は「生きて働く知識」となります。

それに加えて、4回の「家読取組推進期間」には2つのねらいがあると考えられます。

1つは、家庭内の会話の材料を本の内容にすることにより、知的なコミュニケーションの場にするとともに、「共感」「対話」を通して望ましい家庭内環境にすることです。

普段の家庭内の会話は、主に一日のできごとなど、事実を材料にしたものが多く、しかも長い時間をかけられないために、断片的で単発的な会話になりがちです。しかし、休みが続いてお子さんが家にいるときは、比較的まとまった時間をつくることができます。そのようなとき、家族それぞれが異なる行動をするのではなく、顔をつきあわせて何らかのテーマについて会話をするということは、会話自体が知的になるとともに、思春期にあるお子さんだからこそ保護者の方との関係を良好にしていく源となるのです。お子さんが話した本の内容や感想に対して、「そうなんだ」「私も読んだことがあるけど私はこう感じたけどなぁ」「その本貸してくれないかな」「じゃ、今度この本を読んでみたらいいんじゃないかな」などの対話をすることは、保護者の方がお子さんを認めることにもなり、子育てにはとても効果的なことです。

もう1つは、集団の中にあっても個の世界に入ることができるようにすることです。

本校でも、朝読書の時間を設定していますが、その時間だけは学級のみんながいる中でも、自分が準備した本を読むことに没頭し、一人一人が個の世界に入っています。場面に応じて個の世界に入ることができるという技のある人は、民衆の風潮に流されずに自分の考えをもとに自分で判断することができる人材になっていきます。当然、同調圧力に屈することもなくなるでしょう。

休みが続いて家族が家にいる日のどこかで、みんなで本を読んでそれぞれが個の世界に入るという時間帯を設けることは、家族それぞれが互いを尊重することになり、お子さんにとっては保護者の方々から自分自身の存在を肯定的に認められた時間帯になるのです。

思春期になると、保護者との関係よりも友人関係に強い意味を見出し、保護者からの評価よりも仲間同士の評価を意識するようになりますが、それでもお子さんが何かにつまずいたり、困ったりしたときは、保護者の皆様の所に返ってきて、そこがお子さんにとっての居心地の良い場所にならなければなりません。そのような居場所作りのためにも、ぜひゴールデンウィーク期間に家族皆さんで読書をする時間をつくってほしいと思います。

荒川区では平成30年に「読書を愛するまち・あらかわ」宣言以降、街なか図書館の開設や家読の推進などの取組により、読書の意義や重要性について区民の関心及び理解が深まりつつあ

ります。そこで、これらの取組をさらに発展及び充実させ、「読書を愛するまち・あらかわ」宣言の理念をより一層深めるとともに、区民や事業者の読書活動に関する取組を推進し、地域が一体となって、あらゆる世代が生涯にわたり豊かな心を育む読書のまちづくりを推進していくために、昨年度の2月の議会で「荒川区豊かな心を育む読書のまちづくり条例」が議決されたところです。

そこで今回は、読書自体の意義と、家読がもたらす子育てへの効果について具体的にご説明申し上げました。

1年生の自治活動はこれから始まる

本校は自治組織がしっかりとしており、学習・生活上の課題について生徒会組織で目標を立てたり、取組を考えたりして、自治の力で解決を図っています。

まだ1年生は、例えばある専門委員会で合意形成された取組について学級でプレゼンする場合に、朗読型になってしまい、結果、取組自体も目的を忘れて形式的になってしまいがちです。しかし、上級生になるにつれて、専門委員のプレゼンに「こうしてほしい」という願いがこもっていたりし、取組も目的に向かって活発になっていったりします。

1年生は、上級生が活発に自治活動を行っているということにあまり触れる機会がないため、しばらくは教員からの指導に頼ってしまいますが、専門委員会・中央委員会などで上級生の知的な発言を聞いたり、全校朝礼・生徒会朝礼・避難訓練などで上級生の乱れない動きを見たり、さらには運動会や合唱コンクールなどの全校行事で上級生の団結した雰囲気を感じたりすることにより、次第に1年生の自治活動も活発になっていきます。

今は、5月1日開催の生徒総会に向けた学級討議、質問・意見書の作成などに取り組んでいますが、1年生にとっては初めてのことなので、何にどのような質問や意見をしたらいいのか分からないのは当然のことです。しかし、担任等が指導をしながら一生懸命取り組んでいます。そして、生徒総会当日の上級生の発言や本部役員や専門委員長の答弁を聞いて、さらに自治活動というのは、自分たちで自分たちの課題を発見し、自発的にその解決について検討して実践することにより、自分たちの学校生活を自分たちでより良くしていくものだということを深く理解していくことになるのです。

生徒総会の議論の材料となる議案書には、生徒会本部から以下のようなメッセージがあるので紹介いたします。

議案書からの抜粋
◇生徒総会とは◇
　生徒総会は、全校生徒が一堂に集まり論議することで、自分たち一人ひとりが学校をつくっている一員であると自覚していく場であります。
　それは全校生徒でつくる自治の場であり、生徒総会の目的も自治組織としての生徒会をどう作っていくかということになります。
　また、全校生徒による論議を通しての、合意形成の場となります。

本部からの、このメッセージを2・3年生はすでに理解していることと思いますが、1年生はおそらく生徒総会を体験してからしみじみと実感するとともに、第三中学校生徒会の一員としての自覚が高まっていくことと思います。

前期生徒会を牽引していく子どもたちの紹介

以下が、令和5年度前期の生徒会本部役員及び各専門委員で、前期の生徒会を牽引していく子どもたちです。

本部役員	会　長	渡辺　彩恵(3B)	
	副会長	古谷　華蓮(3B)	二藤部　陽織(2C)
	書　記	落合　翠(3C)	竹内　春花(2A)
	庶　務	五十嵐　菜々花(3B)	伊藤　舞帆(2A)

	学級委員会	生活委員会	保健委員会	図書委員会	放送委員会	美化委員会
1－A	小杉　柊太	須田　蘭成	加藤　敬徳	菅野　爽太	町田　頼	犬上　直人
	△正岡　凛南	小林　美月	今西　理沙	△豊島　姫茉利	大森　美空	阪田　さくら
1－B	山田　海璃	植竹　蒼生	△鴨崎　浬久	山生　堂倭	倉田　一慶	△桐山　頼人
	山際　希乃羽	河村　紗希	石山　菜々香	鹿志村　小桜	川又　結花	島尾　恵真
1－C	阿部　正太郎	近藤　亨昭	鎌田　義悠	岡田　凱生	保科　亘汰	田中　伶
	並木　苺衣	春日　茉音	岡本　寧音	長谷川　桃	伊東　ｽﾃﾌｧﾆｰ	小郷　心美
1－D	佐久間　輝道	加藤　昊太	周　嗣昌	亀田　誠	陳　順	深澤　宏杜
	川又　舞花	佐藤　咲月	丹野　綾音	元木　希美	湯本　羽音	芹澤　栞奈
1－E	杉谷　天稀	△辻　陽輝	福山　広翔	内田　琥太朗	△田中　颯人	佐藤　真希
	飯野　愛麻	鈴木　萌花	竹本　理桜	中川　香苗	城﨑　千寧	駒野　茉樹
2－A	小林　佑光	佐野　栄太	○上野　優真	岩田　陽希	松月　莉仁	小川　心
	藤原　妃那	○平塚　美羽	大ヶ谷　萌香	柄澤　怜花	柴田　真衣	△薬師寺　沙耶
2－B	澁谷　厚ノ輔	奥村　京太	時松　煌英	諸岡　遥斗	平　優人	成島　海斗
	鈴木　優実	下野　紗和	二上　結愛	△杵島　希	松村　緑智	○渡辺　那由
2－C	白石　橙哉	鶴田　琉生	矢合　潤成	佐藤　秀亮	○中尾　太音	金澤　昂大
	△山口　玲菜	△杵島　輝	小池　帆夏	加島　彩花	△石井　美月姫	髙瀬　璃咲
2－D	丸谷　周	中村　嵩	久保　俊太	植松　郁喜	水上　裕登	越前谷　大希
	○湯浅　梨央	長谷川　綺香	△佐々木　友花	○宇田　華都	酒井　希美	尾関　日菜
3－A	江森　颯	小杉　律	竹屋　結翔	正久　結翔	○馬場　貴幸	中里　真翔
	中條　珠妃	田村　寧々	須藤　梨珠	山下　莉菜	増田　紬	◎保科　菜月
3－B	山生　悠善	梅村　亮介	花井　碧音	西久保　冬馬	亀田　一志	福田　和也
	奥田　陽和	秦　柚葉	田邉　結月	内田　はな	◎大矢　千央	○近藤　美羽
3－C	武藤　琉征	蔭下　瑛大	小久保　凱登	福岡　優太	土屋　旬之輔	原田　匠実
	鈴木　七海	◎別府　綾虹	◎塚田　樹里	◎清野　まいあ	安部　凛咲	福井　くらら
3－D	◎清原　直哉	○飯島　翼	○大岩　勇翔	岩瀬　貴祐	上岡　爽良	小林　杏獅
	○武政　翠	坂戸　佑衣	原田　椿季	○香取　優羽	新井　琉南	太田　咲良
3－E	末永　照	赤堀　慧侍	小川　優真	大杉　司	国本　万季	浅野　晃志
	伊藤　紗英佳	清水　葵	本郷　結菜	芳沢　愛香	原田　向日葵	竹田　春菜
3－三	大渡　晃己					

◎:委員長　○:副委員長　△:書記

スクリレ機能による欠席等の連絡においてご理解いただきたいこと

スクリレ機能により欠席・遅刻・早退の連絡をしていただきありがとうございます。

学校では、一覧で情報を把握しており、朝の電話連絡の回数も減り、大変助かっております。おそらく、保護者の皆様もこれまで「朝に電話連絡しても話し中ばかりでなかなかつながらない」という不都合があったのではないかと思いますので、双方にとって有効な手段と言えるのではないでしょうか。

ただし、以下の点についてご理解とご協力をお願い申し上げます。

1　教員は8：25の出欠確認のため、担任・副担任総出で教室もしくは学年フロアーに行きますので、スクリレの最終チェックが8:17頃となります。したがって、それ以降にスクリレでご連絡いただいた場合でも、登校していない状況を把握するためにすぐに電話連絡をしてしまう場合がございます。

　その場合は、スクリレでご連絡いただいていることを知らずに電話連絡してしまっているということについてご理解下さい。

2　「症状・連絡事項」の欄は、さほど長い文章を打ち込めるわけではないので、内容によりましては、詳細を伺うために電話連絡を差し上げますが、その際は、文字で表せなかった点につきましてご回答下さいますようお願い申し上げます。

3　文章は、子どもが書いたと思われる、「休みます」「遅刻します」ではなく、「休ませます」「遅刻させます」のように、保護者の方が主語となった表現でお願いいたします。

4　「・・・がなくなったので・・・」など「欠席・遅刻・早退」の連絡以外での連絡帳のような使用は、欠席等の一覧の把握が煩雑になってしまうためお控え下さい。

5　生徒氏名の登録をお忘れの保護者の方がいるようですので、ご確認下さい。

6　今後、PTAからのお便りなども、スクリレにて配信することがありますが、その際は分類を「PTAより」といたします。

これまで印刷してお子さんを通して配布していたお知らせやお便りにつきまして、お子さんが保護者の方に渡し忘れたということのないように、直接保護者の方にお伝えするべき内容は、保護者の方に確実に送信してまいります。ただし、子どもたちも知っておくべき内容があったり、子どもたちへの指導内容があったりする場合は、これまで通り、印刷して子どもに配布して保護者の方に届くようにしてまいります。

これら、用途に応じてスクリレ配信・紙で子どもへ配布の使い分けをしていくことにつきまして、ご理解下さいますようお願い申し上げます。

春季大会が始まっています

すでに中体連では春季大会が始まっています。

本校の運動部も参加しておりますが、3年生にとっては参加する大会もあとわずかとなってきました。本大会が終わると総合体育大会（夏季大会）のみとなります。

私は、決して勝利主義だけになる必要はないと思っています。

ただし、対戦するからには勝った方が達成感を味わえるのも事実です。3年生が、あとわずかな運動部における活動が充実したものになるよう、春季大会を通して経験した課題を克服・改善して最後の夏の大会に向かっていってほしいと思います。

そして最後には、「やりきった」感をもって引退してもらうことを願っています。